月刊漫画

ガロ

No.40
1967
12月号

カムイ伝㊱　赤目プロ作品　白土三平

鬼太郎夜話⑦　水木プロ製作　水木しげる

（前回まで）

日置藩では、永く窮乏財政に追われてきた。この間には、とうぜんこれを打開するための数々の施策が試みられたが、いずれも効を奏さなかった。そして、藩財政はますます悪化の一途をたどった。このとき、藩目付役**橘軍太夫**らによって〝非常法〟の採用がとなえられた。すなわち、藩札発行によって財政立てなおしを図ろうとする意見であった。しかし、これには一方に大きな反対意見があった。それは、目付役橘軍太夫とともに藩内勢力を二分して、彼に対立する**城代家老**である。彼は、〝非常法〟の採用により藩札発行に踏みきることが、御用商人**蔵屋**と結託する目付軍太夫に結果的に有利に作用し、権力と財力とを一挙に相手に与えてしまうことになるとみてとったのであった。だが、〝非常法〟採用に代わる妙策のないかぎり、城代家老のこのようなことからの反対は、あくまでも私情にすぎなかった。

藩札の発行が決まり、城代家老は失脚して隠居同様の身となった。

やがて藩札が発行され、これにともなって正金銀の使用は禁止された。従って正貨を保有する者は、すべて札会所においてこれを藩札に両替えしなければならなかった。また、これを隠匿した者は厳しい摘発を受け、重罪に処せられることとなった。こうして正貨に代わって藩札が新たに市場に出回ると、やがてこれがための影響が各方面に現われはじめた。その著しい例は、諸物価の急騰であった。生活必需品である米、味噌等の高騰によって、民衆はいちどに苦境に追い込まれていった。

ところで、花巻村百姓**正助**らにとって、この夏はさらに苛酷な日々に苦しめられていた。というのは、新開地の鍬下年季の延期にからみ、先に身分差別政策が藩により強化されたことによって、棉作に取り組む正助らは、**苔丸**ら非人たちの助力をたのめず、自力でこれを切り抜けなければならないからであった。そのことは、権力によって百姓との協力関係を引き裂かれ、草場につなぎ止められ、あるいは不逞の百姓らを取り締まるための強化訓練を強いられる非人等にとっても同様であったが、ことにこの夏の旱は異例のことだったのだ。炎天に続く炎天に農地は灼かれ、すでに膝丈ほどに伸び立った棉は萎えがちだった。そこで百姓等は、総出で連日これへの給水に当たらなければならなかったのである。

竜之進、**一角**等も正助らのこの作業に加わっていたが、一角は、なんとしても**領主**を討ちたいと竜之進に訴え、竜之進には自分の道を歩むようにと言い置いて旅立つのだった。永く迷った末のことにちがいなかった。が、竜之進とて確たる〝自分の道〟を摑み得ていたわけではなかったのだ。事実、竜之進のこの心の不安定さが、後に目付の弟**橘玄蕃**との対決においても反映し、小六に変身したカムイに救われる結果に至ったのだった。もちろん、竜之進の危機がそのことからのみ導かれたわけではなく、彼が、無人流の使い手であるこの相手を単に剣客としてだけではなく、権力というものの具体的な一つの現われとして感じとることができなかったところに、すでにそこに導かれる原因があったのであるが……。

ところで、領主を討つべく旅立った笹一角は、関所を破ってそこを脱出したが、彼を慕うアテナが**青木鉄心**とともに彼の後を追い、さらにふとめぐり逢って**アテナ**の美しさに心を奪われた**水無月右近**は、また二人のあとを追うのだった。

一方、**カサグレ**という人物に一命を救われた**橘一馬**は、そこで彼の奇怪な待遇に出会ったのであった。つまり、助けられながらもカサグレから食物を与えられず、自ら得た食物をも彼に奪取される羽目に至ったのだった。そこで一馬は遂にカサグレの結界から逃れようと試みるが、それも封じられた末に、逃れたければそれだけの力を持て、と突き放されるのであった。一馬はそこで思わずおのれの素性を口にしかかったが、すでに権力の背景を失っているいまでは、それがなんの役にも立たず、自分が単にピッコの捨て犬にすぎないことを悟らされたのであった。

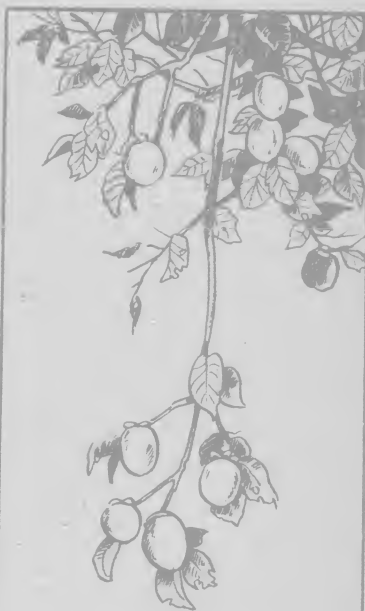
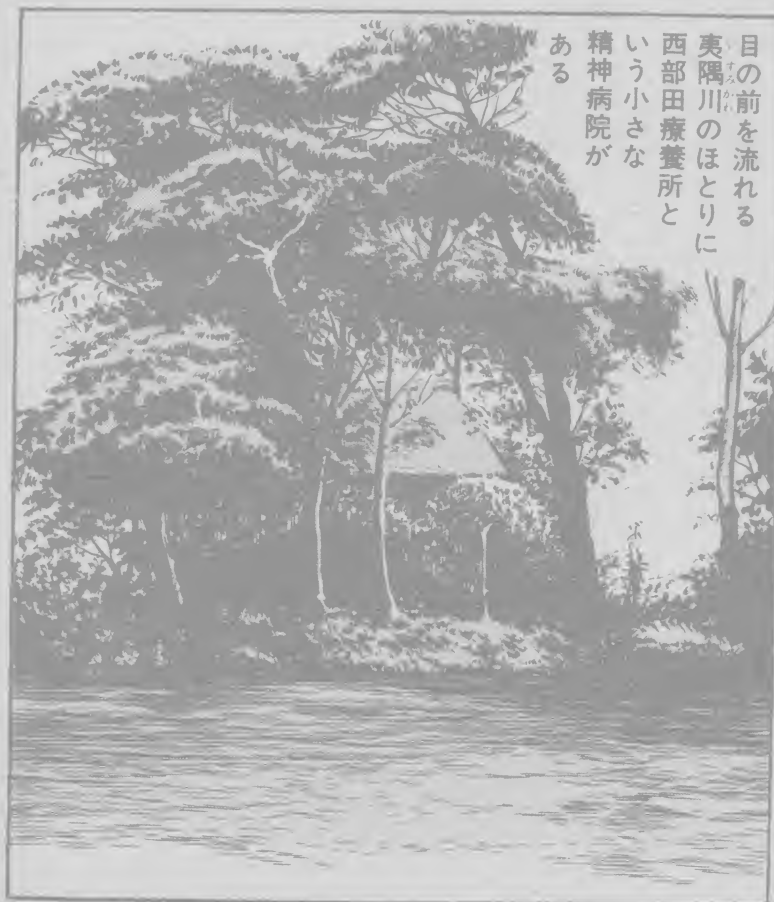
月刊漫画 ガロ 十二月号 目次

表紙絵・白土三平

カムイ伝
第36回
赤目プロ作品
白土三平

西部田村事件

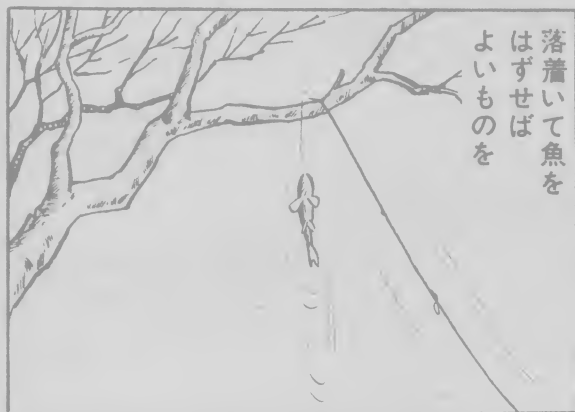
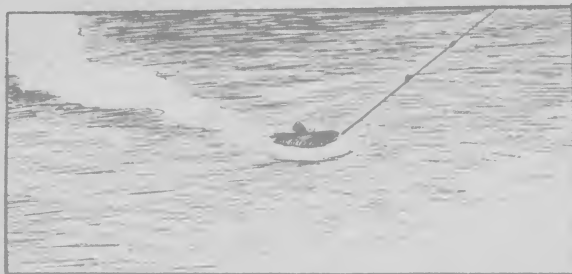
つげ義春

千葉県の外房の
大原から海側とは
逆の方向へ進む
木原線の沿線に
西部田村という
ところがある

柵の破れ目から
中庭を覗くと
患者が十人ばかり
ラジオ体操を
したりしている

夷隅川へ釣りをしに
行くときはこの精神
病院のわきの小径を
通らなければ
ならない

以前同業のSさんに
ここで釣りの手ほどきを
うけた　その時は主に
ハヤ・ヤマベを釣りあげた
ので今度もハヤを釣り
に来たのだ

この淵はSさんの
取っておきの釣場
なのだが背後に灌木
の茂みがあるので竿の
振れないのが難点で
ある

ピッ

注意深くしていても
素人は必ず一度は
しくじってしまう

落着いて魚を
はずせば
よいものを

あわてる
から
プッン

こういう
バカバカしい
へまをやって
しまうのだ

こういうところは
人に見られたくない
ものなので場所替え
をしようと思って
いた矢先
運わるく
僕の泊って
いる宿の
主人に見ら
れてしまっ
た

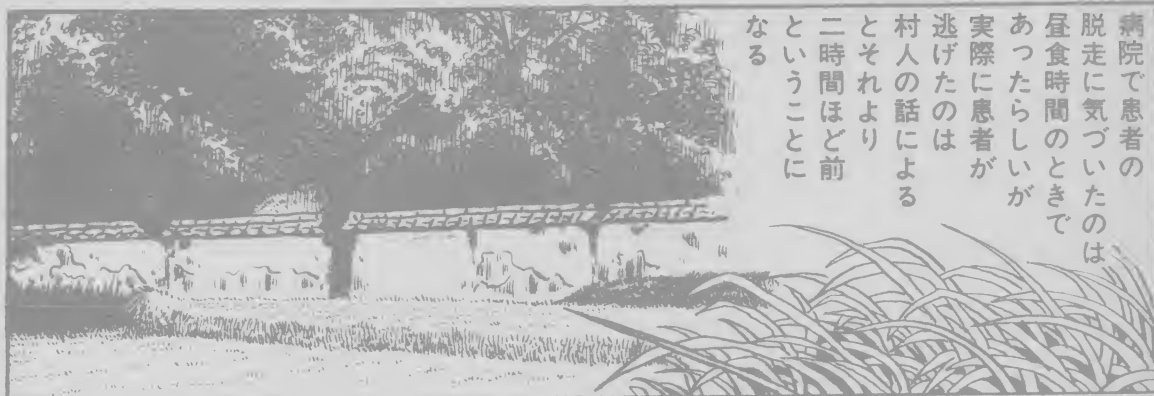
主人の視線を遮るつもりで背伸びなんかしてみたってもうだめなのだ

おめこんな処で釣りなんかしているばやいじやねえぞ

病院の気違いが一人逃げたので村中大騒ぎだ
えッ

わしは消防団員だかい出動せにゃならんのだ

おめこんな処で釣りなんかしているばやいじゃねえぞ

敏速に敏速に

病院で患者の
脱走に気づいたのは
昼食時間のときで
あったらしいが
実際に患者が
逃げたのは
村人の話による
とそれより
二時間ほど前
ということに
なる

おらが
イチんとこの
茶によばれたの
が十時だっぺ
お茶おけに
センベ二めくって

また畑に
引きけえす
べと………

下駄工場の
裏んとこを
通ったら
ヨ
見慣れねえ
奴を見たっ
けんがの

おっか
工場の裏の
こにヨ
白いユカタ
着てうす
まってる
男をヨ

そん時は
そいつが
まさか
気違いだと
は思わなか
ったからな
うっかり
できねえ
あいサ
うっかり
できねえ

この只ごとならぬ事件は、村人を相当に興奮させたようだ　皆んなてんでんに、まきだっぽうやこん棒を持ち、中には昔のゲートルを巻いている者もいる

さっそく捜索隊が編成された　ふた組に分けられ

なんたか
身体が
ひきしまり
ますね

でもまさか
殺すわけ
ではないで
しょうね

実際に
殺すんで
すか
そんときの
調子って
もんだっペサ

いきなり
噛みつかれたり
したら誰だって
逆上するかい
ヨ

しーっ
いたぞ
いたぞ

いま
神社の
欅の木に
登った
ぞい

まんで
猿みてえ
によ

やっぱし気違いっちゃ馬鹿だな
木の上へ登ったらもう逃げられねえっぺ

しかし何処にもいないようですね

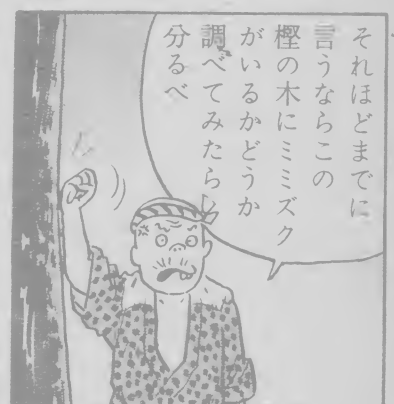
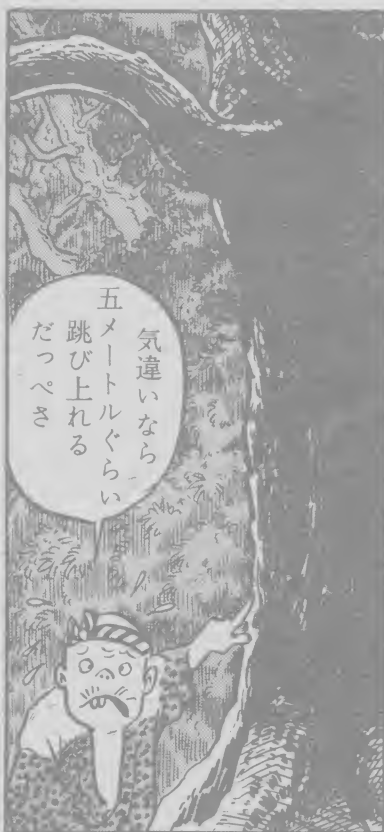
あのへんの葉っぱの陰に息をころしてるだっペヨ
石でも投げてみらっせ

だっけんがよこの木にゃ一間もある青大将が巣くってるっぺ
なんぼ気違いでも気味悪くて登れるもんじゃねえぞ

あいサ登れるもんじゃねえ
おめなにかと見間違いたんだっぺ

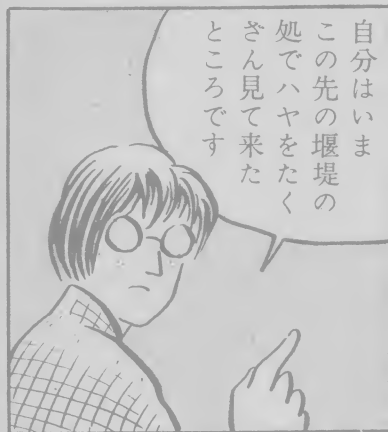
あんが！おらユカタの裾をちらりと見ただ
ちらりと見たんでは分らんがな

急に不信をかってしまったセイちゃんと呼ばれるこの老人はハヤ釣りの名人なのだが村一番のあわて者でもあるのだ

ズルズルズル

さて、ここで初めて気が付いたのだが、この欅の木は、直径二メートルもあり、地上五メートルほどのところまでは手がかり足がかりとなるような小枝は一本もないのだ……セイちゃんはなおも

どうやらセイちゃんは孤憑きと混同していたらしい
捜査はさらに続けられるようだ

僕はそこから引返すことにした
山の中を必死に逃げまわっているであろう患者の様子を想い浮かべると、怖いもの見たさでいた気持が同情に変わってしまったからだ

もとの釣場から上流へ行く崖道は野菊の満開だ
こういう道を魚影を求めて歩くのは悪くないものだ

不意に現われたこの青年は、西部田病院のはいったスリッパを履いている　まぎれもなく脱走した患者である
僕は、素知らぬふりをして通り過ぎようとしたのだが………

彼は道々自分の身の上を手みじかに語った
それによると、彼の実家は、茂原市で洋品店を営み、彼は千葉大学の商学部を身体を悪くしたため二年で中退したのだそうだ

楽しそうに遊んでいるではありませんか

ほらこっちにも

おやこんな小さな穴にもいるぞ

しかしこれではまるで面白くないではありませんか

僕は竿を振って釣りをしたいのですよ

しかしこんなに魚がいるのにそのままにしておくてはない

糸をたれるだけで充分だ

それッきみも、釣りたまえ

おや？
きみはどうかしたのかね

実際おかしいではありませんか
どうしてこんなに深い穴があるのでしょう
きみはその穴に落ちてしまったのだね

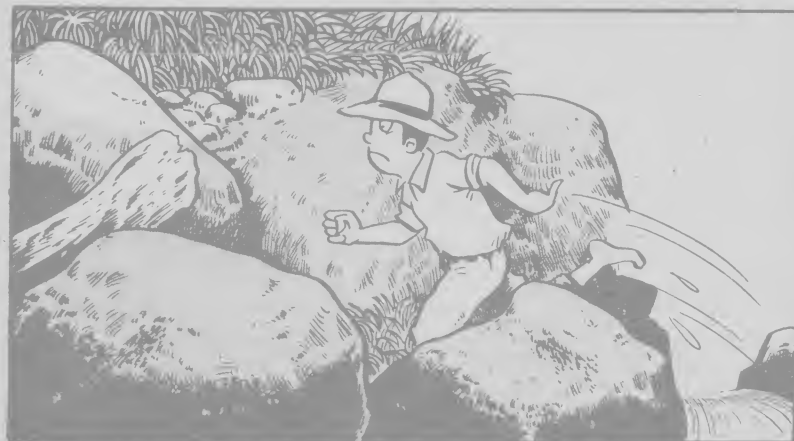
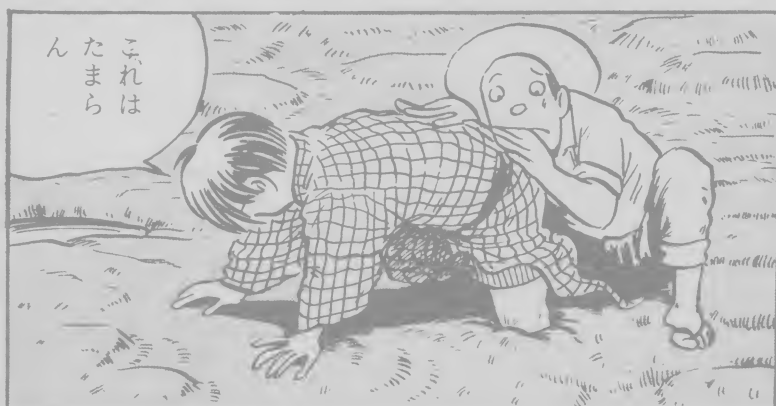
ぬけないのですか
どうしてもぬけません

これは堰堤工事のとき杭でも打ち込んだ跡でしょう
穴の底に魚が一匹いるようです

くすぐるのですか
ええあばれているようです

魚のやつびっくりしているんだな
ああくすぐったい

これはたまらん

きみッこれは助太刀を頼まなくてはならんぞ
ポン

病院へ連絡をとり
現場へとってかえすと
彼の足はすでに穴から
ぬけ出ていた

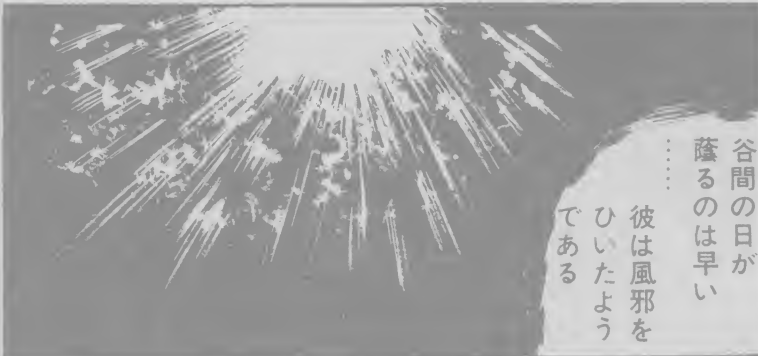
悪戦苦闘した
らしく
膝のあたりが
血で染まり
岩の上で
ぐったりなって
いた

きみ
よく頑張
った
寒い．
ですね
寒いです
ね

ハックション

谷間の日が
蔭るのは早い
……
彼は風邪を
ひいたよう
である

川の水で
洟をかんで
から
医師に連れ
られて行った

彼が何故
無断で病院を
ぬけ出したのか
それは分らない
……
秋の散歩と
しゃれたので
あろうか……

いずれにしても
この人騒がせな事件は
意外なアクシデントにより
あっけない幕切れと
なったのである

とんだ巻ぞえを
くったハヤは
穴の底でクッタリと
なっていた

そっと流れに
放してやると

猫柳の下で
しばらく
じっとして
いて……

それから
勢よく
泳いで
行った

完　42.9.25